

岩手県文化財調査報告書第50集

東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書

—VI—

昭和55年3月

岩手県教育委員会
日本国有鉄道盛岡工務局

東北新幹線關係埋藏文化財調査報告書

—VI—

序

本県には私たちの祖先が長い間につくりだし、伝えてきた貴重な文化遺産が豊富に存在しています。この貴重な遺産を保護、保存すると共に新たな文化創造の基礎とすることが私たちの責務でもあります。

全国新幹線鉄道整備法にもとづき県民待望の東北新幹線建設工事が施行されることと関連し、失われようとするルート内48遺跡について、日本国有鉄道盛岡工事局からの委託により岩手県教育委員会が調査主体となり、昭和47年度から昭和54年度までの8年間にわたって発掘調査、整理作業、報告書作成作業を実施してまいりました。53年度は、40遺跡分を3分冊に分け報告書を刊行し、最終年度である本年度は残り8遺跡について刊行するはこびとなりました。

本報告書は、東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅵとして江刺市落合Ⅱ遺跡、北上市鬼柳西裏遺跡、南館遺跡の調査結果のまとめです。落合Ⅱ遺跡は、平安時代における土器、土製品、木製品、木簡、植物種子等を数多く含んだ旧河道の堆積層の調査内容であり、鬼柳西裏遺跡は縄文時代より近世にわたる典型的複合遺跡で、特に南館遺跡における江戸時代墳墓と共に当時の信仰や生活の状態を知る上で貴重な資料を提供できたと思います。

この報告書がいささかでも埋蔵文化財の活用と学術研究のために役立つことができれば幸いです。

最後にこの調査について長期間にわたり御援助、御協力いただいた地元教育委員会をはじめ関係各位に対し心から感謝申し上げます。

昭和 55 年 3 月

岩手県教育委員会

教育長 新 里

盈

例 言

1 本書は東北新幹線関係遺跡発掘調査報告書7分冊の中の6分冊として、昭和48年度に発掘調査した北上市所在の南館遺跡、それに49年度に調査を実施した江刺市所在の落合Ⅱ遺跡と昭和50年、51年度の2ケ年に亘って発掘調査を実施した北上市所在の鬼柳西裏遺跡の3遺跡について作成したものである。

2 遺跡の記載は南（江刺市）から順に編集した。

3 本書収録遺跡の発掘調査、および調査資料において次の方々からご指導、ご助言を賜わった（敬称略）。

- ・岩手大学名誉教授 板橋 源
- ・岩手大学教授 草間 俊一
- ・北海道大学助教授 林 謙作
- ・岩手県文化財審議会委員 司東 真雄
- ・江刺市文化財調査委員 佐嶋興四右衛門

4 本書における資料の鑑定、分析などについては次の方々と機関からご教示、ご協力を賜わった（敬称略）。

・石材鑑定

岩手県立杜陵高等学校教諭 佐藤 二郎

・種子鑑定

農林水産省林業試験場東北支場 村井 三郎

・墨書文字（墨書土器）の筆跡鑑定

岩手大学人文社会科学部教授 黒田 正典

・人骨の鑑定

岩手医科大学医学部教授 桂 秀策

・骨片の鑑定

岩手大学農学部教授 兼松 重任

・樹種鑑定

財団法人元興寺文化財研究所

・土器内面付着物（ウルシ）分析・鑑定

岩手県工業試験場

・花粉分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

・木片¹⁴C試料測定

社団法人日本アイソトープ協会

5 本書に掲載した地形図、空中写真は建設省国土地理院発行の5万分の1地形図、20万分の1

地勢図、および2万分の1空中写真を使用したものである。

- 6 グリッド配置図は、日本国有鉄道作成による500分の1地形図を使用した。
- 7 土質柱状図は、日本国有鉄道所有のボーリング資料等を参考にした。
- 8 本書の観察表、図版は次の要項に従って作成されている。
 - (1) 遺跡における層相と遺物の色調観察は、小山、竹原編著「新版、標準土色帖」日本色研事業㈱を使用した。
 - (2) 遺構、遺物の実測図は原則として統一した縮尺になるよう努めた。
- 9 方向は、新平面直角座標第X系(東北)による座標北を矢印で示してある。

$$\begin{array}{r} \text{経度} \\ \text{原点} \quad \left(\begin{array}{l} 140^{\circ} 50' 00'' 000 \\ 緯度 \quad 40^{\circ} 00' 00'' 000 \end{array} \right) \end{array}$$

各遺跡の基準線との方向角は別表(第I表)のとおりである。

- 10 遺物、写真、実測図等の資料は、岩手県教育委員会事務局文化課において保管している。

11 調査主体者

岩手県教育委員会・日本国有鉄道盛岡工事局

12 調査担当者

岩手県教育委員会事務局文化課

- 13 本書の執筆のまとめは次のものが中心にあたった。

- ・調査の経過.....嶋 千秋
 - ・調査の方法・整理の方法等.....朴沢 正耕
 - ・落合Ⅱ遺跡.....朴沢 正耕
 - ・南館遺跡.....菅原弘太郎
 - ・鬼柳西裏遺跡.....細谷 英男・鈴木 隆英
- なお遺跡・図面の整理・実測および写真の撮影などは期限付臨時職員がこれを補助した。

- 14 各遺物の執筆にあたっては、つとめて文中の記述の統一に心がけたが、十分な検討を欠いた向きもある。

目 次

序文

1. 調査の経過……………(1)
2. 調査の方法……………(4)
3. 整理の方法……………(5)
4. 遺物保存処理の方法……………(5)
5. 広報活動の実施……………(6)

本文

- 北上地区南部の概観……………(11)

南 館 遺 跡

- I 遺跡の位置と環境……………(17)
- II 調査に至る経過……………(17)
- III 調査の方法と経過……………(18)
 1. 調査の方法……………(18)
 2. 調査の経過……………(18)
- IV 調査の結果……………(18)
 1. 遺跡の基本層序……………(18)
 2. 発見された遺構と遺物……………(24)
 - (1) 墳 墓……………(24)
 - (2) 経 塚……………(35)
 - (3) ビット類……………(35)
 - (4) CA 03 集石遺構……………(42)
 - (5) グリッド出土遺物……………(43)
- V 考察とまとめ……………(45)
 - (1) 墳墓について……………(45)
 - (2) 経塚について……………(48)
 - (3) ビット類について……………(49)
 - (4) ま と め……………(50)
 - 人骨鑑定……………(53)

鬼柳西裏遺跡

I 位置と立地	(59)
1. 位置と環境	(59)
2. 周辺部の遺跡	(59)
II 調査の方法と経過	(60)
〔1〕方法	(60)
〔2〕経過	(60)
III 基本層序	(65)
IV 発見された遺構と遺物	(66)
〔1〕縄文時代の遺構と遺物	(66)
(1) 遺構	(66)
(2) 遺物包含層	(72)
(3) 各遺構内および包含層出土の遺物	(79)
(4) 縄文時代の遺構・包含層以外からの出土遺物	(104)
(5) まとめ	(104)
〔2〕平安時代の遺構と遺物	(113)
1. 竪穴住居跡と出土遺物	(113)
2. 考察	(148)
(1) 竪穴住居跡	(148)
(2) 出土遺物	(149)
(3) まとめ	(157)
〔3〕中・近世遺構と遺物	(161)
(1) AD 24溝	(161)
(2) X F 18堀跡遺構	(161)
(3) 御飯屋の堀跡遺構	(161)
(4) AE 15掘立柱建物跡	(170)
(5) 石敷遺構	(173)
(6) 一字一石経塚	(173)
(7) XC 09掘込み土壇	(207)
(8) 郷倉跡	(207)
(9) ビット類および溝	(209)
(10) 遺構外遺物	(209)

Ⅱ まとめ	(220)
追記	(220)

落合Ⅱ遺跡

I 遺跡の位置と環境	(225)
1. 位置と地形・地質	(225)
2. 周辺の遺跡	(229)
II 調査の方法と経過	(234)
1. 調査の方法	(234)
2. 調査の経過	(236)
3. 調査時における安全の確保	(236)
III 調査の結果	(238)
1. 本遺跡の基本層序	(238)
2. 発見された遺構と遺物	(240)
(1) 平安時代の遺構と出土遺物	(240)
(1) Aブロック(旧河道内)の遺物堆積層と出土遺物	(240)
(2) Bブロック(微高地)の遺構と出土遺物	(325)
(3) 他の調査区内における遺構と出土遺物	(328)
IV 考察	(332)
(1) 旧河道と遺物出土状況の関連性	(332)
(2) 遺物について	(333)
(3) 遺跡の性格と環境	(341)
V 結語	(344)
(付)・落合Ⅱ遺跡出土植物遺体鑑定報告	(347)
・落合Ⅱ遺跡試料花粉分析報告	(349)
・落合Ⅱ遺跡出土の墨書文字に関する筆跡学的分析	(352)
・落合Ⅱ遺跡出土の獣骨鑑定結果	(363)
・鉄滓の分析結果	(364)
・落合Ⅱ遺跡出土樹種等鑑定報告	(365)
・埋蔵文化財出土遺物(木簡等)科学処理報告	(367)

写真図版

- ・北上地区空中写真……………(375)
- ・江刺地区空中写真……………(376)

- ・南館遺跡……………(377)
- ・鬼柳西裏遺跡……………(393)
- ・落合Ⅱ遺跡……………(421)

- ・発掘調査担当者および協力機関……………(484)
- ・発掘調査地元作業員名簿……………(484)
- ・整理事業員名簿……………(485)
- ・岩手県教育委員会事務局文化課職員（埋蔵文化財関係）……………(486)

序 文

1. 調査の経過

昭和46年から実施された岩手県内東北新幹線建設工事に係する埋蔵文化財発掘調査は一関市より盛岡市に至る約101kmの間がその対象であり、発掘調査実施前の協議、分布調査の段階から発掘調査実施、調査結果の報告書刊行まで約9年の歳月を要した。ここでは 1.発掘調査実施前の経過 2.年度別発掘調査の経過 3.整理報告書作成の経過に大別し、その概要についてまとめてみたい。

(1) 発掘調査実施前の経過

全国新幹線鉄道整備法(昭和45年5月18日法律第71号)に基づく東北新幹線建設予定地内における県内埋蔵文化財の取扱いについての最初の協議は昭和46年5月17日に日本国有鉄道盛岡工務局と岩手県教育委員会との間で行なわれ、運輸大臣に提出する申請書に添付する文化財資料は遺跡台帳により作成することとし、今後県教育委員会は分布調査実施のための準備と、建設工事に関連する範囲内での遺跡についての情報を提出することにした。昭和46年11月2日、新幹線建設予定地内の分布調査実施のための協議をもち調査員は県教育委員会が関係市町村教育委員会の協力のもとに、県文化財専門委員、考古学専攻者、発掘調査経験者の中から委嘱を市町村単位ごとに班の構成をした。遺跡分布調査は宮城県境より盛岡市に至る約101kmを幅2kmの範囲で実施することとし、11月20日より約2カ月の期間で終了した。その結果93遺跡が確認された。

昭和47年4月に主管課である社会教育課に4名の埋蔵文化財担当職員を文化財主査として配置し、さらに4名の嘱託補助員を採用した。東北新幹線担当職員として嶋千秋文化財主査が当り他は東北縦貫自動車道関係の業務を担当しそれぞれの業務の遂行に当たった。更に同年6月1日より10日までの間、新幹線ルート用地杭の設置時期に合わせセンター杭を中心に幅20mを含む遺跡範囲確認のための現地調査を嶋千秋、菊地郁雄両文化財主査によって行ない、その結果43遺跡を発掘調査対象遺跡として決定した。その後、新幹線関連事業として東北本線北上貨物操作場の建設予定地と、用地問題で現地踏査ができずにいた花巻地区の分布調査の追加により最終的に48遺跡が発掘調査対象の遺跡となった。その結果に基づき調査行程、方法等について協議を進め、全遺跡が記録保存を前提としての発掘調査を実施することにした。

(2) 発掘調査の経過

当初、東北新幹線開業は昭和51年度であり49年度中に発掘調査を終了しなければ支障があるということが調査計画立案にあたっての最大の悩みでもあった。そのため野外の発掘調査を優先先行させ、調査結果の整理、報告書の作成、刊行は別途に考えることとした。そのことから冬期間に入っても発掘調査を継続せざるを得ないこともあり、調査の精度や報告書作成の面からも反省すべき点が多々あった。調査開始後の経過の中で国内経済に大きな影響を与えた総需要抑制政策等が原因となって、東北新幹線開業時期が延期となり発掘調査期間は昭和47年10月から52年10月までとなった。調査結果の整理と報告書作成作業は53・54年度の2カ年で実施することとした。な

お埋蔵文化財発掘調査委託の契約は年度ごとに日本国有鉄道盛岡工務局長と岩手県知事との間で締結された。調査主体者は岩手県教育委員会教育長、調査主管課は岩手県教育委員会事務局文化課である。

次に年度ごとの主な発掘調査経過について略記する。

昭和47年度 調査員3名、補助員1名、調査期間10月25日～12月8日。3遺跡。

矢中町所在の下赤林Ⅰ遺跡、下赤林Ⅲ遺跡、高畑遺跡を調査した。この調査は用地未買収時期の調査であり、国鉄が地権者より発掘承諾書を得ての調査であった。

昭和48年度 調査員8名、補助員5名、調査期間5月1日～1月29日。8遺跡。

4月、文化課の新設と共に埋蔵文化財調査班が誕生し、本格的な発掘調査が開始された。しかし、用地買収の関係などから年間スケジュールが確定しないまま、まず北上貨物操作場関連遺跡の南館遺跡よりスタートした。ここでは発掘調査方法の統一化を計るため新幹線班全員による合同研修調査を実施した。そして7月より1遺跡2名の調査員と1名の補助員を最低の班構成員とし、遺跡規模によって構成員を調整することとして8遺跡の調査を実施した。夏休み期間には発掘調査の経験のある教員、岩手大学生、京都女子大生の協力参加を得た。12月に入って杉の上Ⅱ遺跡において平安時代の焼失堅穴住居跡から多量の炭化材の発見があり、炭化材の処理上やむを得ずビニールハウスの設置の中で1月下旬まで冬期間の調査となった。

昭和49年度 調査員8名、補助員5名。調査期間4月8日～12月20日。17遺跡。

江刺市と稗貫郡石鳥谷町所在の遺跡が主な調査地域となった。江刺市落合Ⅱ遺跡は分布調査による遺跡範囲は北上川流域に広がる河岸低地における水田面より約1m高い微高地一帯としていたが、水田面における新幹線高架橋建設工事中に多量の遺物が発見され、地元教育委員会からの連絡があり、そのため遺跡範囲を広げ調査した結果、水田面下旧河道の泥炭層から平安時代の豊富な遺物資料の発見となり貴重な遺跡となった。江刺地区の調査は北上川東岸一帯であり各遺跡は蛇行しながら南下する北上川とその支流である広瀬川、人首川、伊手川の氾濫により度々冠水をうけていることから遺構の検出、精査の際に土層判別と遺構範囲の確認に手間どり多くの時間を費やした。

昭和50年度 調査員8名、補助員7名。調査期間4月10日～2月21日。15遺跡。

調査地区が、一関市、江刺市、北上市、花巻市、紫波郡紫波町、都南村、それに盛岡市と広範囲におよび、調査班相互の連絡、調整が困難な年であった。7月に北上市鬼柳町町分の新幹線建設予定地内にあったイチョウの大木の根元から一字一石経を地元民である佐藤忠二、佐藤丑蔵氏が発見されたことから鬼柳西裏遺跡としての取り扱いをすることとした。調査の結果縄文時代、平安時代、近世の各時期にわたる複合遺跡となり2年継続の調査となった。また江刺市宮地遺跡は奈良時代から平安時代にかけての大集落となり調査中に2基の井戸が発見され、そのため乾水期である冬期間の調査となった。厳寒の中で2月末までの調査となり、遺構実測図の完成と井戸枠のとり上げを行なった。紫波町西田遺跡は北上山地における小丘陵の西端にあり蛇行する北上川によって切離された台地に立地し滝名川と北上川低地に囲まれた残丘上にある。標高100m前後で周辺の水田面との比高は約10mである。この丘陵のほぼ中央を南北に縦断する新幹線予定地

を対象としたが、ほとんどが山林であり遺跡としての確証はなかなかつかめなかった。立地形に調査根拠をもったこともあって、まず本年度は遺構検出のための調査を目的としたグリッド方式と重機使用（バックホー）による表土はぎを行なった。その結果、縄文時代早期、中期、平安時代にわたる大遺跡であることが確認された。なお、年度末人事異動で昭和48年度より調査を担当した蜂谷伸平氏が陸前高田市立高田小学校へ転動された。

昭和51年度 調査員7名、補助員8名。調査期間4月9日～12月23日。9遺跡。

昨年度よりの調査継続である江刺市宮地遺跡、北上市鬼柳西裏遺跡、紫波町西田遺跡と盛岡市所在の4遺跡が調査の中心であり本年度で48全遺跡について調査が及んだことになった。

西田遺跡は北部地区に縄文時代中期の墓塚群を中心とする集落の全貌が現われ次年度の調査によって結着をつけざるを得ないことになった。48年度から新幹線班で調査担当した穴倉圭介氏が県立遠野農業高校へ、菊池久氏は釜石市立大松小学校へそれぞれ年度末人事異動で転動された。

昭和52年度 調査員6名、補助員7名。調査期間4月11日～12月15日。1遺跡。

紫波町西田遺跡のみの調査となった。縄文時代中期における墓塚群、円筒形ピット群、貯蔵穴群、住居跡群によって構成された大遺跡の調査をもって新幹線関連48全遺跡の発掘調査を終了した。調査結果の整理はそれぞれの年度における発掘調査終了後、分室において図面、写真遺物等の整理を一部実施した。

(3) 整理・報告書作成の経過

昭和53年度 調査員6名、期限付臨時職員12名。

53、54年度の2年間にわたる本格的な整理作業に入った。53年度は48遺跡のうち40遺跡の報告書作成のための作業を実施し、3分冊を刊行した。1分冊は一関、江刺地区（10遺跡）、2分冊は北上、花巻、石鳥谷地区（11遺跡）、3分冊には紫波、矢巾、都南、盛岡地区（19遺跡）を収録した。

昭和54年度 調査員6名、期限付臨時職員12名。

本年度は整理作業の最終年度に当たり、新幹線関連遺跡48遺跡の残り8遺跡の報告書作成のための作業を実施した。本年度は報告書4分冊とし、前年度の3分冊に続き第5分冊として江刺市の宮地遺跡、6分冊として江刺市の鴻ノ巣館遺跡、石鳥谷町の高畑遺跡、矢巾町の白沢遺跡の3遺跡、6分冊には江刺市の落合Ⅱ遺跡、北上市の南館遺跡と鬼柳西裏遺跡の3遺跡、第7分冊には紫波町の西田遺跡をそれぞれ収録した。

2. 調査の方法

遺跡の調査は原則として以下のような方法を用いた。

(1) 調査対象範囲の選定

新幹線建設地内、及び付帯施設地内にかかる遺跡は、全て調査対象とした。

(2) 調査区の設定

調査対象範囲全域にグリッドを設定し、計画的な調査と同時に遺構の平面的位置の把握につとめた。グリッドは調査地の地形を考慮し、東北新幹線の任意の中心杭の2点(東京基点の距離程が明示してあるもの)を原点とし、両者を結ぶ線、およびこれに直交する線を基準線とし3m単位に割付け、30mで1地区とした。グリッド名は東西方向を数字、南北方向をアルファベットで表わし、両者の組合せで呼称した。なお、地区名は調査区の北から順に設定した。

(3) 探索発掘と全面発掘

① 探索発掘と全面発掘

調査対象範囲内における遺構の分布状況を調べるため、原則として3m×3mのグリッドを市松状に粗掘りし、検出作業を進めた。また、基本的な層位の把握のための深掘りを設定した。遺構や遺物を含む層が検出された場合は、その具体的内容と分布関係などを究明するため、必要な範囲にわたって全面発掘を行なった。

② 遺構調査の方法

検出された遺構については、該当のグリッド名を付した。その場合、最も北西に位置するグリッドで呼称した。遺構の精査にあたっては、記述項目を統一したカードなどを使用した。

③ 遺物の取り上げ

a 遺物は原則としてグリッドごとに取り上げ、遺跡記号、出土年月日、出土地点、出土層位を記録の上、取り上げた。

b 出土遺物のうち、その遺構に直接関係するものや、年代決定資料となり得るものについては、出土レベルと位置を平面図に記録し、遺物番号を付して取り上げた。

④ 実測図の作成

断面図—断面図は基本層位、遺構の堆積状態や遺構細部の在り方を示す遺構断面を作成した。原則として、原図の縮尺は $\frac{1}{50}$ であるが、カマド、炉、埋設土器などの細部については、必要に応じて $\frac{1}{20}$ などの縮尺を用いた。各層における土色、土性、混入物、堅さ、遺物のあり方などの注記は統一を心がけたが一部統一を欠いたものもある。

平面図—平面図は調査区域を表現したもの、遺構や遺物の出土状況を記録するための部分的なものがある。原図の縮尺は $\frac{1}{50}$ を原則としたが、必要に応じて $\frac{1}{20}$ などの縮尺を用いた。測量方法は、遺り方測量により作図した。

⑤ 写真の記録

記録として撮影した写真には、35mm版モノクロ写真、35mm版カラー写真、35mm版エクタクローム写真(スライド用)、6×7モノクロ写真、35mm版赤外線写真などがある。

⑥ その他の記録

調査記録として、調査日誌、業務日誌を各遺跡ごとに備え、記録した。また、調査終了後の整理時においても、作業日誌を各遺跡ごとに備え、記録した。

第 I 表 第 VI 分冊収録遺跡基準線方向角 (N…座標化)

遺跡名	原点距離程	原点間方向角	備考
落合Ⅱ遺跡	431.700 — 431.800 km	N-30°48'30"-W	(グリット中心軸) N-59°36'32"-E
南館遺跡			
鬼柳西裏遺跡	443.860 — 443.880 km	N-18°45'00"-E	

3. 整理の方法

発掘調査の期間内で現場作業と並行して行った整理作業は遺物の洗浄だけであり、大部分は分室の整理場所で行われた。整理にあたっては図面、写真とそれぞれ整理基準を作成して実施した。

(1) 図面整理の方法

発掘調査時に作成した図面は次のような要領で整理した。

第一原図は、点検、修正の上、登録番号を付し、それをもとに第二原図を作成し、それぞれを図面台帳に記載した。

(2) 遺物整理の方法

遺物は洗浄し、遺跡記号、採取年月日、遺構名、地区名、層位、遺物番号等を付し、接合、復元作業を進めた。その後分類作業を進める中で、資料化できる遺物について、実測図、拓本の作成をし、写真撮影をした。

(3) 写真整理の方法

写真は遺跡ごとにそれぞれのネガと密着焼付のものをアルバムに貼付し、遺構名、地区名、遺物番号、関係実測図番号、撮影方向などを記入し、整理した。

4. 遺物保存処理の方法

出土遺物のうち、木製品、鉄製品については可能な範囲で保存処理をおこなった。本書収録の遺物のうち、木簡、木製品は財団法人元興寺文化研究所に委託し、高分子 PEG 含浸処理およびアルコールエーテル法による保存処理をおこなった。

5. 広報活動の実施

調査内容を広く知らせ、文化財についての関心を深めてもらうことを意図し、次のような活動をした。

- 現地説明会
- 現場だよりの発行
- 関係機関への資料提出
- 埋蔵文化財展

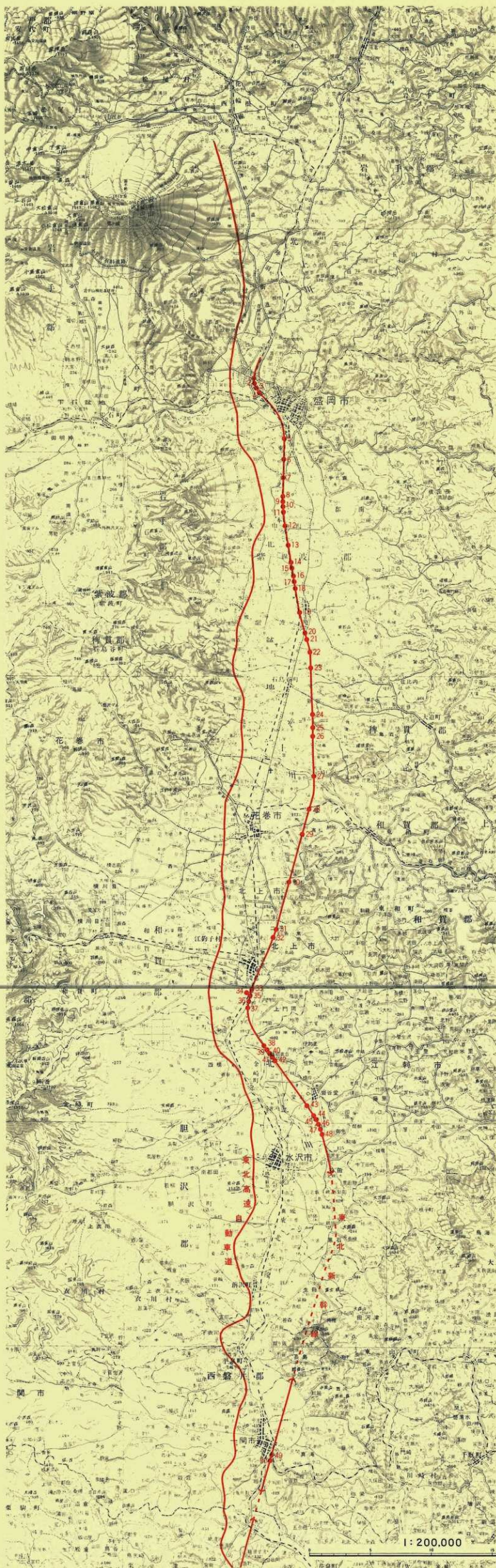
第II表

東北新幹線関係遺跡一覧

(位置一覧は第I表を参照)

所在地	遺跡名	調査対象面積	調査期間	収録報告書№
一関市	機織山I遺跡	3,500㎡	昭50.9.30~昭50.11.29	I
"	機織山II遺跡	1,470	昭50.9.22~昭50.11.11	I
江刺市	中屋敷遺跡	5,000	昭48.12.10~昭48.12.22	I
"	鴻ノ塚館遺跡	6,400	昭49.6.24~昭49.10.24	V
"	力石遺跡	2,240	昭49.4.8~昭49.4.18	I
"	落合I遺跡	2,560	昭49.4.18~昭49.8.5	I
"	落合II遺跡	2,420	昭49.4.8~昭49.8.8	VI
"	宮地遺跡	3,600	昭50.9.1~昭51.7.26	IV
"	鶴羽衣遺跡	1,280	昭49.4.9~昭49.5.14	I
"	鶴羽衣台遺跡	960	昭49.4.19~昭49.5.10	I
"	瀬谷子遺跡	2,400	昭49.5.8~昭49.6.19	I
"	五十瀬神社前遺跡	1,600	昭49.6.4~昭49.7.30	I
"	谷地遺跡	2,720	昭49.7.25~昭49.9.3	I
北上市	八木畑遺跡	800	昭49.11.28~昭49.12.9	II
"	松ノ木遺跡	480	昭50.12.16~昭50.12.25	II
"	西野遺跡	5,000	昭50.9.1~昭50.12.25	II
"	南館遺跡	4,660	昭48.5.1~昭48.7.26	VI
"	鬼柳西裏遺跡	4,400	昭50.9.3~昭51.12.15	VI
"	野田I遺跡	3,000	昭51.8.6~昭51.8.28	II
"	野田II遺跡	1,920	昭50.9.1~昭50.9.19	II
"	堀ノ内遺跡	2,400	昭50.7.7~昭50.8.30	II
花巻市	高松遺跡	2,000	昭50.6.4~昭50.7.9	II
"	八幡遺跡	1,800	昭51.10.7~昭51.11.25	II
石鳥谷町	高畑遺跡	2,720	昭49.10.25~昭49.12.20	II
"	大明神遺跡	3,680	昭49.10.25~昭49.11.22	II
"	大曲遺跡	1,920	昭49.10.25~昭49.12.12	II
"	幅遺跡	2,400	昭49.11.18~昭49.11.29	II
紫波町	野上遺跡	2,400	昭49.10.17~昭49.10.29	III
"	西田遺跡	29,600	昭50.4.26~昭52.12.15	VII
"	大銀遺跡	960	昭50.4.10~昭50.4.26	III
"	大日堂遺跡	2,240	昭50.5.16~昭50.6.10	III
"	田頭遺跡	1,760	昭49.9.5~昭49.10.16	III
"	杉ノ上I遺跡	3,402	昭48.10.16~昭48.12.28	III
"	杉ノ上II遺跡	4,276	昭48.10.16~昭49.1.29	III
"	杉ノ上I遺跡	7,200	昭48.7.18~昭48.10.16	III
"	古館駅前遺跡	3,360	昭48.10.1~昭48.11.30	III
"	古館構遺跡	4,200	昭48.9.18~昭48.12.8	III
矢巾町	白沢遺跡	3,726	昭48.7.20~昭48.9.29	V
"	又兵衛新田遺跡	2,080	昭49.10.18	III
"	高畑遺跡	640	昭47.11.24~昭47.12.2	III
"	下赤林I遺跡	2,720	昭47.10.25~昭47.12.16	III
"	下赤林II遺跡	3,200	昭48.11.13~昭48.12.19	III
"	下赤林III遺跡	2,560	昭47.12.2~昭47.12.18	III
郡南村	下水井遺跡	1,760	昭50.4.10~昭50.4.24	III
"	津志田遺跡	4,800	昭50.4.23~昭50.5.15	III
盛岡市	南仙北遺跡	800	昭50.4.10~昭50.4.25	III
"	厨川欄腰定地	4,600	昭51.5.17~昭51.10.16	III
"	前九年I遺跡	5,150	昭51.4.23~昭51.6.3	III
"	前九年II遺跡	3,400	昭51.4.19~昭51.6.2	III
"	長畑遺跡	6,370	昭51.4.9~昭51.5.15	III

*杉ノ上I・II・III遺跡はI遺跡として登録してある。



1. 長畑道跡
2. 前九年日道跡
3. 前九年I道跡
4. 厨川橋梁定地
5. 南仙北道跡
6. 津志田道跡
7. 下永井道跡
8. 下森林田道跡
9. 下森林II道跡
10. 下森林I道跡
11. 高畑道跡
12. 又良-新田道跡
13. 白沢道跡
14. 古館橋道跡
15. 古館駅前道跡
16. 杉/上I道跡
17. 杉/上II道跡
18. 杉/上III道跡
19. 田頭道跡
20. 大日堂道跡
21. 大銀道跡
22. 西田道跡
23. 野上道跡
24. 幅道跡
25. 大曲道跡
26. 大明神道跡
27. 高畑道跡
28. 八幡道跡
29. 高松道跡
30. 坂/内道跡
31. 野田II道跡
32. 野田I道跡
33. 奥野西道跡
34. 南館道跡
35. 西野道跡
36. 松/木道跡
37. 八木畑道跡
38. 谷地道跡
39. 五十嵐神社道跡
40. 飯谷子道跡
41. 鶴刈衣台道跡
42. 鶴刈衣道跡
43. 宮地道跡
44. 落合II道跡
45. 落合I道跡
46. 力石道跡
47. 鳴ノ車道跡
48. 中屋敷道跡
49. 機織山II道跡
50. 機織山I道跡

1:200,000

(第1圖) 東北新幹線關係道跡位置圖

本

文

北上地区南部の概観

1 北上地区南部の地形と現状

岩手県北の山中に源を発し、北上盆地東辺部を南下する北上川はやがて、県南の北上市にさしかかる。そして市の中心街の南東部で、奥羽山脈から東流してきた和賀川と合流し、さらに南下してゆく。この合流点の南西部一帯には北上、和賀の両河川の河岸低地を挟んで、広大な台地が奥羽山脈の麓まで広がる。

この台地は夏油川などの河川によって形成された洪積世の扇状地性河岸段丘で、地形分類上最低3期の段丘面を含み、低い順に金ヶ崎段丘、相去段丘、六原段丘などに面区分されている。各段丘面とも小河川によって開析され奥部に向かって、大小多数の谷が入り込んでいる。しかしながら台地上は一般に水利の便が悪く、第二次大戦前までは大部分の地域が山林や草地として利用されるとどまり、農耕地は谷沿いかその周辺部に見られるに過ぎなかった。ところが戦後、台地上の各所で開田が行われ、農地化が進んだ。その上近年は広域圃場整備事業の一環として、大規模な開田工事が行われ、台地上の景観は著しく変貌を遂げた。

さらに相去台地東部一帯は、北上市の中心市街地の拡大に伴ない、大規模な住宅団地が造成されるなど、宅地化が急速に進行している⁽⁵¹⁾。

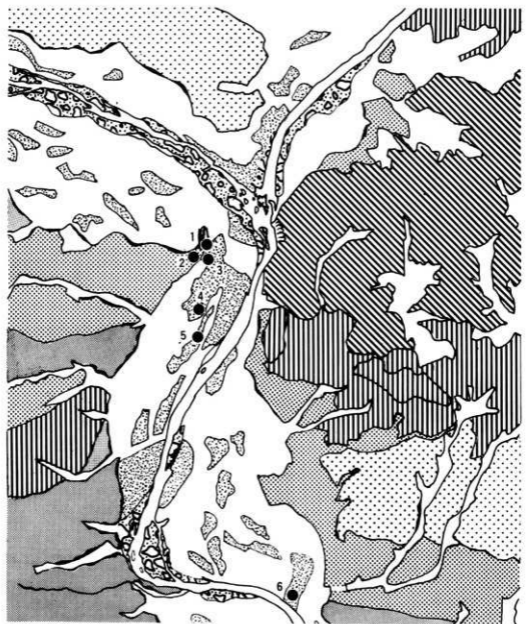
本書に収録する南館遺跡、鬼柳西裏遺跡はいずれも上記の相去台地北東端の縁辺部に立地しており、国鉄北上駅から南々西約2kmの範囲内に位置している。

なお第Ⅲ図地形分類概念図は岩手県企画開発室発行の北上山系開発地域土地分類基本調査「北上」、経済企画庁発行の土地分類基本調査「水沢」を参照した。

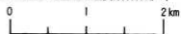
2 周辺の遺跡

両遺跡の所在地周辺の台地や沖積平野の微高地および山麓部は古くから、人間活動の場として利用されてきたと思われ、下成沢^(註2)、齊羽場^(註3)などの旧石器時代以降多くの遺跡が知られている。その中には東北新幹線にかかわる遺跡として西野^(註4)、松ノ木^(註5)、八木畑^(註6)の3遺跡も含まれているが、他にも縄文時代中期の樺山^(註7)、中～後期の八天^(註8)、晩期の九年橋^(註9)、牡丹畑^(註10)、和田前の各遺跡^(註11)、古代の上大谷地^(註12)、高前墳^(註13)、大筋^(註14)、卯ノ木^(註15)、尻引^(註16)、秋子沢^(註17)、下大谷地^(註18)、猫谷地^(註19)、上台^(註20)、外山の各集落跡や江釣子の古墳群^(註22)、瀬谷子古窯跡群^(註23)、極楽寺跡^(註24)、白山庵寺跡^(註25)、そして中世、近世の鹿島館^(註26)、丸子館^(註27)、鬼柳古墓群^(註28)、伊達^(註29)、南部の藩境塚などの各種の著名遺跡が知られている。

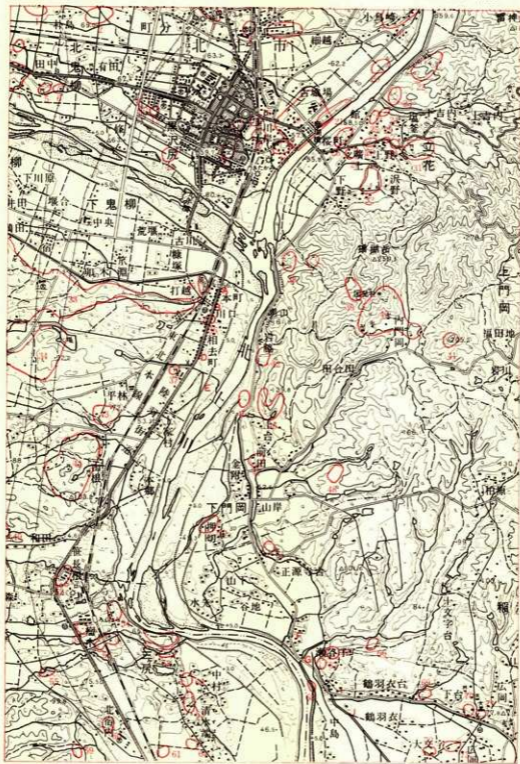
これらの遺跡は、いずれも当地方に於ける人間生活の歩みを知る上で、貴重な遺跡であるが、各種の開発工事による破壊が進行しており、その保存状態は必ずしも良好とは云えない現状にある。



1. 鬼柳西裏遺跡 2. 南館遺跡 3. 西野遺跡
4. 松ノ木遺跡 5. 八木畑遺跡 6. 谷地遺跡



第IV図 北上市南部地形分類概念図



- A. 鬼柳西裏遺跡 B. 西野遺跡 C. 南館遺跡 D. 松ノ木遺跡 E. 八木畑遺跡
 F. 谷地遺跡 G. 五十瀬神社前遺跡 H. 瀬谷子遺跡 I. 鶴羽衣台遺跡 J. 鶴羽衣遺跡

第V図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第四表 周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名称	時代	番号	遺跡名称	時代	番号	遺跡名称	時代
1	下谷地遺跡	平安	25	館(II)遺跡	縄文(中)	49	赤坂遺跡	
2	曾山遺跡	平安	26	立花遺跡		50	馬場先遺跡	平安
3	上藤木遺跡		27	館(I)遺跡	縄文(中)	51	兵部館遺跡	平安
4	備谷地古墳群	奈良	28	館(IV)遺跡	縄文	52	和田遺跡	縄文(晩)、平安
5	八幡古墳群	奈良、平安?	29	立花小学校下遺跡	縄文(後)	53	西浦遺跡	縄文
6	八幡遺跡	平安	30	館(V)遺跡	縄文(後)	54	榎木遺跡	縄文
7	常盤台遺跡	平安	31	高館遺跡		55	北丸巻遺跡	縄文(中)、平安
8	黒沢尻北島グラウンド遺跡	平安	32	沢野遺跡		56	花沢遺跡	縄文
9	梨子山遺跡		33	柳上館		57	東浦洲六遺跡	
10	鶴渡館遺跡		34	高前塚遺跡	平安	58	後生平遺跡	縄文
11	織治町南遺跡		35	白髭遺跡		59	高瀬沢日遺跡	縄文
12	火薬庫西遺跡		36	中成沢遺跡	平安	60	鹿巻北遺跡	平安
13	九年橋遺跡	縄文(晩)	37	小楢沢遺跡	縄文(中)平安	61	仁の台遺跡	縄文
14	源訪神社境内遺跡	奈良、平安?	38	陣ヶ丘遺跡		62	十三塚	
15	清水小路東遺跡	平安	39	西谷遺跡		63	丸子館遺跡	
16	和野遺跡	縄文(中)	40	国見山薬師寺跡	平安	64	七塚塚	江戸
17	浮島古墳		41	八王子遺跡		65	瀬谷子寮跡	平安
18	黒沢尻権跡		42	岩輪遺跡		66	稲瀬古墳群	
19	方八丁遺跡		43	平林遺跡	平安	67	馬ノ木遺跡	縄文、平安
20	牡丹遺跡	縄文(晩)	44	鶴野跡、山根、梨ノ木1日、00ノ木、奈良山遺跡	奈良、平安	68	中島遺跡	平安
21	上川原遺跡	奈良、平安?	45	西羽場遺跡	田石器、縄文	69	鶴羽衣館跡	
22	岩深遺跡		46	上の台遺跡		70	稲瀬中学校遺跡	奈良、平安
23	横町遺跡		47	相田遺跡		71	稲瀬小学校遺跡	
24	館(III)遺跡	縄文(中)	48	下門岡・ヒジリ塚		72	十三遺跡	奈良、平安?
						73	大文字遺跡	

注1) 経済企画庁 土地分類基本調査「水沢」(1963)

岩手県企画開発室 土地分類基本調査「北上」(1975)

注2) 岩手県教育委員会、北上市教育委員会、江刺市教育委員会、その他によって調査されている。詳しくは各遺跡の調査報告書、現地説明会資料、略報および「北上市史」第一巻などを参照されたい。
注29)

南 館 遺 跡

遺 跡 記 号 : MD

所 在 地 : 北上市相去町字門覺46-1他

調 査 期 間 : 昭和48年5月1日~7月26日

調 査 対 象 面 積 : 4,660㎡

平 面 測 量 基 準 点 : E A 50

I 遺跡の位置と環境

南館遺跡は北上市相去町字門覚地内に所在し、国鉄東北本線北上駅の南々西約2kmに位置する。遺跡は村崎野段丘面に相当する相去台地北東端に立地し、遺跡に接して東崖線下を東北本線が走る。また遺跡の北側に接しては伊達、南部の藩境がほぼ東西に走り、遺跡地内には狭み塚の形態を残す掘切坂脇大塚がある。しかし昭和30年代の通学路拡中工事の際に破壊され、現在は一部その残痕をとどめるだけである。^(注1)

遺跡の地目は殆んどは山林で、西側一部畑となっている。標高は65～70.5m程で東に向けての緩傾斜を示している。遺跡の立地する台地の北側は水田地帯となって拡がり、北上市街地へと続く。水田面との比高は約15mを測る。一方南側は水田及び畑として利用され、15m程の比高をもつ。東崖下は東北本線が走り、相去の町が一望できる。

周辺の遺跡のうち新幹線にかかる遺跡としては、当遺跡の東崖下に西野遺跡^(注2)があり、北の鬼柳西裏遺跡^(注3)へと続く。さらに南へは松ノ木遺跡^(注4)が国道14号線の西に接してあり、北上川へ近接して八木畑遺跡^(注5)がある。

注1) 岩手県教育委員会 「南部伊達両藩境塚—北上川以西の部—」(昭48) 岩手県文化財調査報告書第17集

注2) 岩手県教育委員会 「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書—II—」(昭54) 岩手県文化財調査報告書第34集

注3) 本書収録遺跡

注4) 岩手県教育委員会 「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書—II—」(昭54) 岩手県文化財調査報告書第34集

注5) 岩手県教育委員会 報告書第34集

II 調査に至る経過

南館遺跡は新幹線ルートに直接かかる遺跡ではなく、新幹線関連事業に伴う東北本線北上操車場建設予定地となった事により、岩手県教育委員会が昭和47年8月に分布調査を実施した結果発見された遺跡であり、山林の中に2～3のマウンドを確認している。

遺跡は前述のように字門覚に所在し、一説にこの付近は門覚上人の墓があった場所とも伝えられ、元禄年間の古絵図^(注1)には南部、伊達の藩境に接して本調査区の東端にあたる位置に方形に形どられ、「もんがくがはか」と記されている。また安永5年風土記御用書上^(注2)には古塚として「文覚塚」の記載がみえる。しかしその場所についてはのべられていない。^(注3)

いずれ明治初年までは本調査区付近は墓地として利用されており、分布調査の際のマウンドの発見により新幹線関連遺跡として調査するに至った。^(注3)

注1) 「相去、六原道之全図」 元禄12年5月24日 浅水末男氏所蔵

注2) (財)宮城県史刊行会 「宮城県史28、別刷」(昭37)

「陸中国胆沢郡相去村史料巻之一」 浅水末男氏所蔵

注3) 明治10年9月の古絵図「字門覚」 北上市役所相去支所所蔵

Ⅲ 調査の方法と経過

1 調査の方法

調査はグリッド方式を基本にした。グリッドの設定にあたっては新幹線の東京起点 443,600 m と 443,700 m の二点を結ぶ直線上の東京起点 443,640 m より西に90° 振り、その延長112.20 m の地点を遺跡の基準点 (B, P) とし、E A 50 と名づけた。この E A 50 を基点にして第1図のようなグリッドを設定した。本遺跡の基準線 (中心軸) は地形とマウンドの並びを考慮して設けた。基準線方向角は、N-59° 36' 32" - E である。

調査はグリッドを基本にして、マウンドは4分法、マウンド以外は3×6 m のグリッドを市松状に粗掘して遺構の探索を行い拡張していった。南斜面はトレンチを設定した。

なお遺構の呼称についてはマウンドは東より1号マウンド、2号マウンド……マウンド以外の遺構についてはグリッド名を付した。

2 調査の経過

南館遺跡は昭和48年4月文化課の新設に伴い、新幹線調査班が誕生し本格的な発掘調査がスタートしたその最初に着手した遺跡である。

作業は雑物撤去から開始した。調査予定地は杉林と雑木林の山林で占められており、雑物の撤去に実質2週間を費した。この作業と併行して、グリッド設定にかかる基準測量を行った。分布調査の段階で2～3のマウンドの存在が知られてはいたが、雑物撤去作業の進行に伴いマウンドの数が増え、最終的には6基になった。

粗掘りはマウンドに影響のない部分と南斜面より実施した。粗掘り作業と併行してマウンドを中心に地形測量を行った。測量はトラヴァースをくみ10cmコンタ1/20の縮尺で作成し、6月15日で終了した。

マウンドやその他の遺構の精査は6月5日より集中的に実施し、7月26日をもって終了した。

Ⅳ 調査の結果

1 遺跡の基本層序

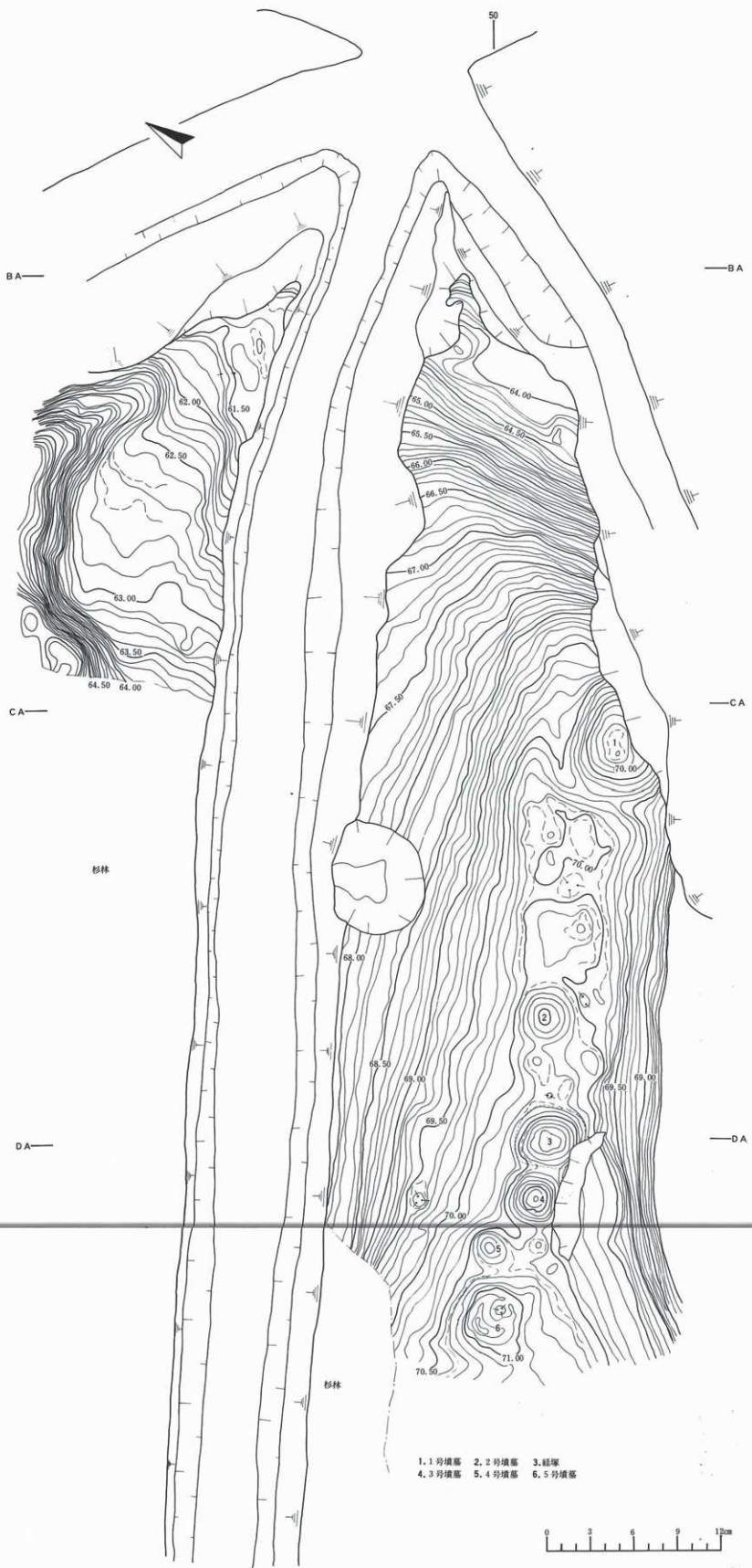
本遺跡の基本的層序を把握するため D I 50 グリッドに深さ約1.8 m の深掘りを実施した。以下深掘りの断面観察により層序をみる。

第Ⅰ層：黒褐色 (7.5 Y R 2/2) 土でシルト。深掘り部分は畑地なので耕作土となる。D F ラインより東側は杉林であり、腐蝕土混入で黒味を増す。乾燥時は黒味の少ない灰黒色を呈する。層厚15～20cm。

第Ⅱ層：黄褐色 (10 Y R 5/8) の火山灰土 (地山) でバミスの混入が粒子状或は小塊状に認められる。三つに分層される。層厚は約60cmを測る。

- a 赤味を帯びた黄褐色土で比較的粘性がある。
- b 明度の低い黄褐色土で粘性は弱く、微細砂を含む。
- c 明度の低い黄褐色土で粘性は強い。

第Ⅲ層：浮石層で三つに分層される。層厚は約100cmを測る。



第1圖 遺跡地形圖

- 1. 1号墳墓
- 2. 2号墳墓
- 3. 経塚
- 4. 3号墳墓
- 5. 4号墳墓
- 6. 5号墳墓



EA —

50

—EA

a 風化を強く受けた浮石層
で、IIa層に浮石が混入。

b aより風化の進行しない
浮石層。

c 緻密な浮石層であり、中
間に暗色帯が認められる。

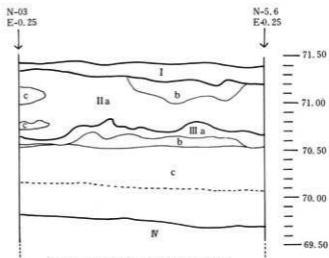
第IV層：灰白色の粘土層。

なお中川久夫等の調査結果の
柱状図によると相去台地の本遺
跡付近^(注1)では表土下は火山

灰、浮石層、砂質火山灰そして
礫層と続く。西に移行するにつ

れ^(注2)（奥羽山脈に近づくにつれ）て、浮石層と礫層の間に火山角礫、スコリアが入ってくる^(注3)（77）。

いずれ深掘り結果の断面観察と矛盾するものではない。



第3図 土層図(D150グリッド西壁)

2 発見された遺構と遺物

調査の結果遺構としては墳墓6基、経塚1基、ピット10個、それに集石遺構1ヶ所が発見され2基の墳墓からは人骨も検出された。また遺物としては古銭、縄文時代の土器片、石器、それに旧石器1点が発見された。

以下各遺構毎に記述するが、図上における遺構の位置標示はグリッドを基本とした。グリッドの中心軸であるEW-00ラインと座標北との方向角差はN-59° 36' 32" -Eである。

なお本報告書での遺構名は調査時の遺構名と若干異なるが、対照表を第1表に示した。

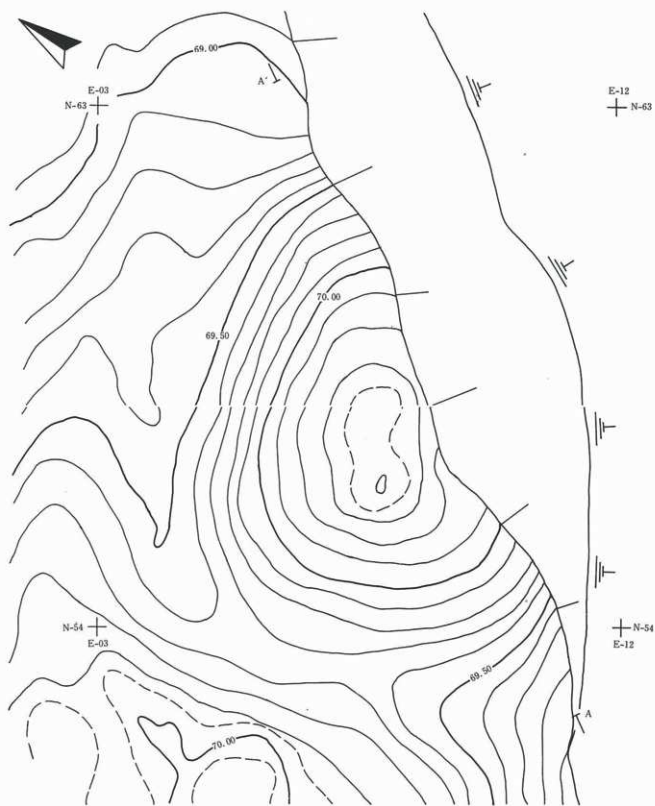
第1表 遺 構 対 照 表

No	調査時遺構名	本書収録遺構名
1	1号マウンド	1号墳墓
2	2号マウンド	2号墳墓
3	3号マウンド	経 塚
4	4号マウンド	3号墳墓
5	5号マウンド	4号墳墓
6	6号マウンド	5号墳墓
7	DD50ピット	DD50墓壕（6号墳墓）
8	CF53ピット	CF53ピット
9	CH12ピット	CH12ピット
10	CH53ピット	CH53ピット
11	CH56ピット	CH56ピット
12	CJ06ピット	CJ06ピット
13	DA03ピット	DA03ピット
14	DB12ピット	DB12ピット
15	DH56ピット	DH56ピット
16	DI56（小）ピット	DI56ピット
17	DJ56（大）ピット	DJ56ピット
18	CA03集石	CA03集石

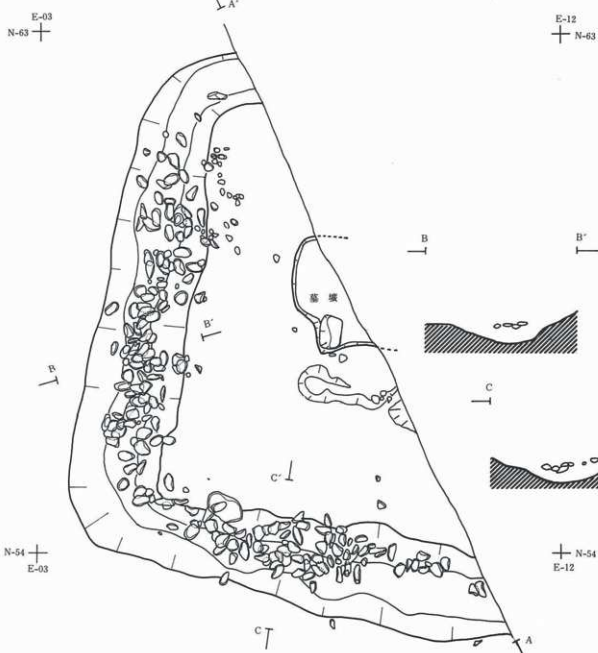
(1) 墳墓

1号墳墓（第4図、写真図版3）

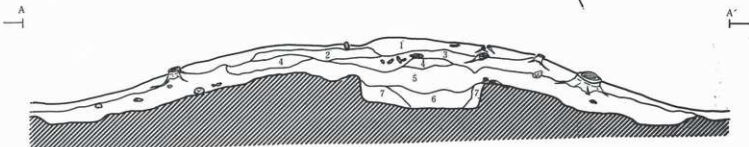
〔位置と現状〕 6基の墳墓のうち一番東側、台地の東端に位置するもので、本調査区ではBJ53、BJ56、CA53、CA56、CA59の各グリッドにかかるものである。墳墓は戦後の道路改修工事の



E-03 N-63 E-12 N-54



N-54 E-03 E-12 N-54



1. 明るい黒褐色土で植物根による擾乱が著しい 2. 黒味のある褐色土、風化した地山が小塊状に混入 3. うすい黒色土、2より少ないが地山が塊状に混入、人工的礫石も混入
4. 地山のブロック、比較的しまっている 5. 黒褐色土、地山が粒子状又は小塊状に混入炭化粒も含む 6. 黒褐色土と地山の混合土 7. 6より地山の混入多い

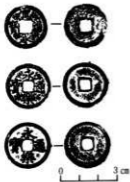


第4図 1号墳基平面図

ため、東側のおよそ半分がすでに破壊され完全な姿をとどめてはいない。封土の中央部にも攪乱が及んでいるが、マウンド全体の形は方形である。残存する西半分から推定すると1辺7.5～8 m程で封土の高さは約1 mを測る。なおマウンド上には若干の川原石が散在していた。

〔封土〕土の積み方に特別の版築は認められず、基本的には黒褐色土とバミス混入の黄褐色土の混土層である。第1層はマウンド形成後の表土で、層中には長さ20～30 cm程までの大小種々の川原石がかなりの数で検出された。川原石は墳頂付近には散発的であったが、裾の方には一面に検出された。本来は封土の崩れを防ぐため全面を覆っていたと考えられるが、年月の経過と共に滑り落ちたものと思われる。

〔周溝〕半壊しているため南東部は不明であるが、本来は方形にめぐっていたと思われる。残存している北西半分の周溝より推定すると1辺7～7.5 mを測り、全体で28～30 m程と推定される。上巾150～160 cm、下巾30～60 cmと極めて不定形で深さは15～25 cmを測り、浅い皿状の断面を呈する。周溝は地山まで掘り込まれている。埋土は



第5図 1号墳墓出土古銭拓影

黒褐色の単層で埋土上部には封土より滑り落ちた川原石がかなり入りこんでいた。

〔墓壇〕墓壇は封土の中央に位置する。半壊しているが長軸180 cm、短軸140 cm程の隅丸長方形と推定される。深さ約70 cmを測る。長軸方向はN-17°-Wである。埋土は黒褐色土と地山の黄褐色土が不規則に混入している。

〔出土遺物〕墓壇内よりの出土遺物はない。封土の第1層より永楽通宝2枚、寛永通宝1枚の古銭、鉄製紡錘車の破片、それに縄文土器片が数片出土した。

なお1号墳墓に近接してCA50グリッドの表土中より、縦約10 cm、横約8 cm、厚さ1.5 cm程の不整形な扁平川原石の片面に墨書されてある石が発見された。これについては項を改めて述べる。

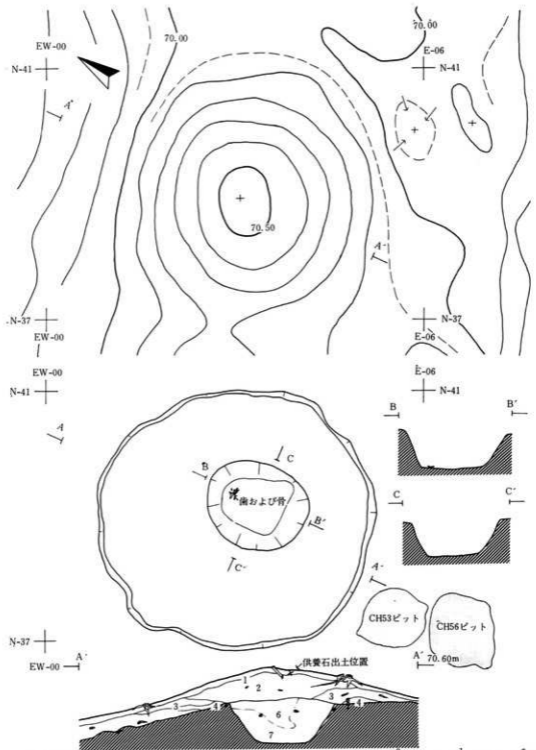
2号墳墓 (第6・7・8図、写真図版4-2・3、12-1・2)

〔位置と現状〕1号墳墓より5 m程西に位置するもので、本調査区ではCG50、CG53、CH50、CH53、の各グリッドにかかるものである。マウンドは木根等の攪乱はあるものの、ほぼ完全な姿をとどめており、全体の形状は円形で、土



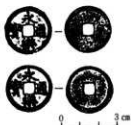
第6図 2号墳墓出土供養石

— 南 館 遺 跡 —



1. 黒褐色土 2. 黒褐色土に地山が塊状に混入 3. 2に比べて地山の混入多い
 4. 黒色土に地山較若干混入 5. 4と同じであるが木根の攪乱著しい
 6. 黒褐色土と地山の混合土 7. 6より地山の混入多い

第7図 2号墳基断面図



第8図 2号墳墓出土古銭拓影

椀頭型である。直径約4m、封土の高さは約60cmを測る。

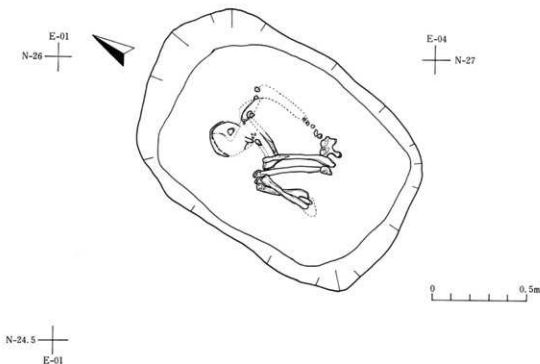
〔封土〕土の積み方に特別な版築は認められない。

〔周溝〕存在しない。

〔墓壇〕封土の中央やや東寄りに位置し、長軸約160cm、短軸約130cmの楕円形～隅丸方形のプランを呈し、深さは約60cmを測る。長軸方向はN-7°-Wでほぼ南北方向である。墓壇内より、人骨の小片と歯を検出した。これ等の人骨と歯は墓壇の底面に密着したかたちで、北側に寄って検出された。副葬品等は検出されなかった。

〔出土遺物〕封土中より古銭と供養石、それに若干の縄文土器片が出土した。

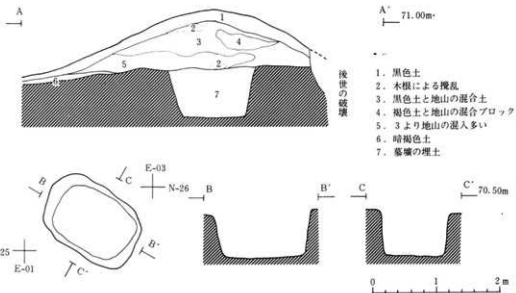
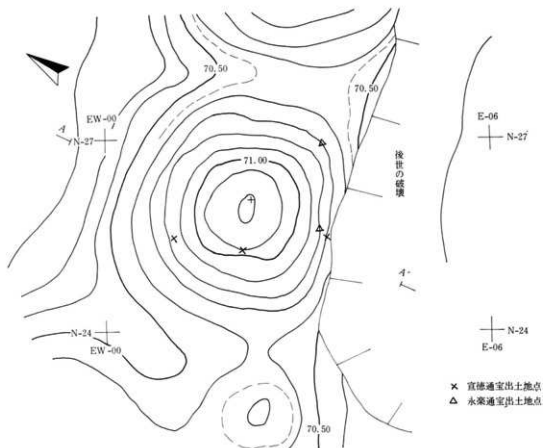
古銭は2枚出土しており、いずれも永楽通宝である。封土の裾の方、表土下10～12cm程より2枚重ね合って検出された。周辺には炭化物が多く認められた。供養石は縦約25cm、横約14cm、厚さ約5cmの不整隅丸長方形の川原石の片面に墨書してあり、宝永2年6月（1705年）の年号が読みとれ、7回忌のための供養石であることも判明した。この供養石は墳丘中央部付近南面の第1層より文字面を下にして出土した。縄文土器片は封土中に散在するものでいずれも細片である。



第9図 2号墳墓人骨出土状況図

3号墳墓（第10・11、写真図版5、12-2）

〔位置と現状〕経塚と重複し、4号墳墓に近接して位置し、本調査区ではDA50、DA53、DB50、DB53の各グリッドにかかるものである。墳墓の南側は一部破壊されているが、封土の極端な崩



第10図 3号墳墓平断面図

壊は認められない。
マウンド全体の形状は円形の土饅頭型である。直径約4 m、封土の高さは約90 cmを測る。

経塚との新旧関係については、経塚の周溝が3号墳墓の封土下になっており、経石の一部が3号墳墓の封土内に混入している

こと等より3号墳墓が新しい。

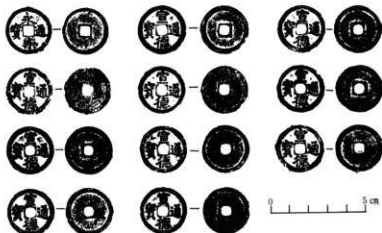
〔封土〕土の積み方に特別な版築は認められない。

〔周溝〕存在しない。

〔墓壙〕封土の中央やや西寄りに位置し、長軸約160 cm、短軸約110 cmの隅丸長方形のプランを呈し、深さは約70 cmを測る。長軸方向はN-2°-Eで南北方向である。墓壙内より女性1体の人骨を検出した。人骨は頭を北に向けて埋葬されており、屈膝のかたちをとっていた。墓壙内よりの副葬品等の出土はなかった。

〔出土遺物〕封土中よりは古銭と縄文土器片若干出土した。

古銭は合計13枚の出土をみており、本調査区の墳墓ではその出土量は最も多い。古銭は宣徳通宝10枚、永楽通宝2枚、判読不能1枚で圧倒的に宣徳通宝が多い。永楽通宝2枚と宣徳通宝3枚は墓壙検出面から、他は封土第1層からの出土である。縄文土器片は散発的出土である。



第11図 3号墳墓出土古銭拓影

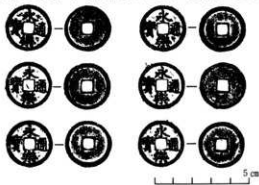
4号墳墓 (第12・13図、写真図版6、12-2)

〔位置と現状〕3号墳墓と5号墳墓に近接して位置し、本調査区ではDC 03、DC 50グリッドにかかるものである。マウンド全体の形状は円形の土饅頭型である。直径約3 m、封土の高さは約50 cmを測り、本調査区の墳墓のうちでは一番小型である。

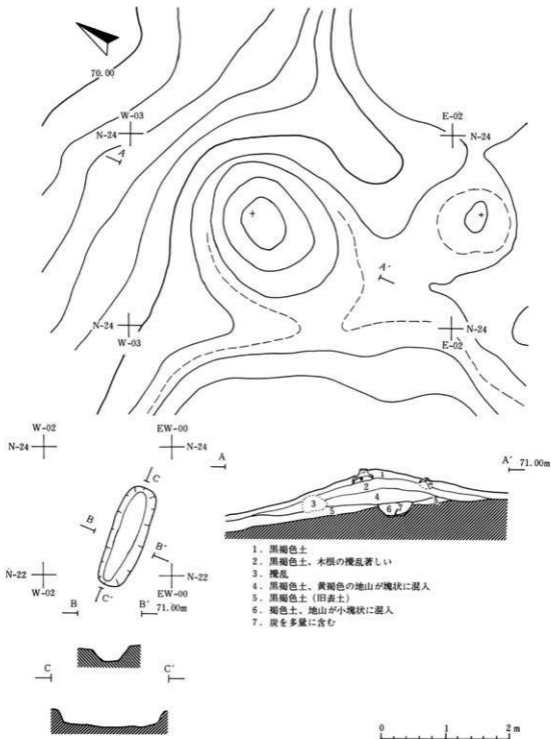
〔封土〕特別な版築は認められない。

〔周溝〕存在しない。

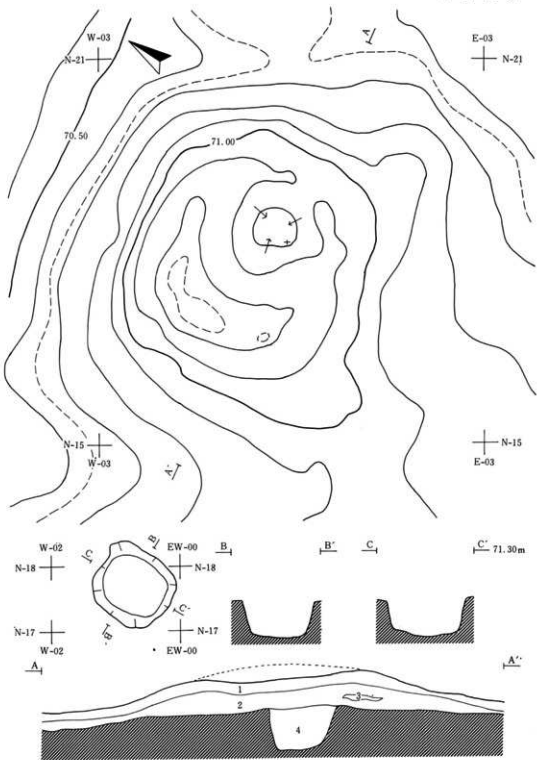
〔墓壙〕封土の中央やや東寄りに位置し、長軸約160 cm、短軸約50 cmの長楕円～隅丸長方形のプランを呈し、深さは約25 cm



第12図 4号墳墓出土古銭拓影



第13図 4号墳基断面図



1. 黒褐色土、木根の擾乱
2. 黒褐色土と地山の混入土
3. 特に地山の混入が多い
4. 黒褐色土と地山の混入土（墓壁の埋土）

0 1 2m

第14図 5号墳墓平面断面図

を測る。長軸方向は $N-79^{\circ}-E$ で東西方向である。墓塚の埋土は2層に大別され、上層は地山が小塊状に混入した褐色土で、下層は木炭屑を多く含んだ黒色土で、数個のコブシ大の焼石も検出された。この木炭屑に混じって焼骨片が2点検出された。

〔出土遺物〕遺物としては古銭と縄文土器片がある。古銭は墓塚内からの出土で6枚を数え、すべて永楽通宝である。縄文土器片は細片で封土中から分散的に出土した。

5号墳墓（第14図、写真図版7-1・2）

〔位置と現状〕本調査区では一番西側に4号墳墓に近接して位置し、DD 03、DD 50、DE 03、DE 50グリッドにかかるものである。封土の中央部が本根等後世の擾乱を大きく受けて墳頂部が陥没しているが、マウンド全体の形状は円形の土饅頭型である。直径は約5mであり、封土の高さは陥没部で約60cmを測るので本来は70cm以上の高さはあったと思われる。

〔封土〕特別の版築は認められない。

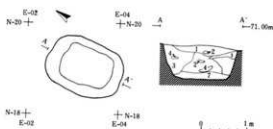
〔周溝〕存在しない。

〔墓塚〕封土の中央部に位置し、長軸約120cm、短軸約110cmを測る隅丸長方形のプランを呈し、深さは約60cmを測る。長軸方向は $N-2^{\circ}-W$ で南北方向である。墓塚の埋土は黒褐色と黄褐色の地山が斑状に混入したものである。副葬品としては古銭が出土した。

〔出土遺物〕古銭と縄文土器の細片が若干出土した。古銭は5枚を数え墓塚埋土からである。いずれもかなり腐蝕がすすんでおり、完全なかたちのものはない。4枚は墓塚底部より出土、2枚は永楽通宝とくわうじて確認できたが2枚は判読不能であった。他の1枚は墓塚確認面よりの出土で判読は不能であった。縄文土器片は封土中に散在したかたちで出土し観察不能であった。

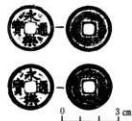
DD 50 墓塚（第15・16図、写真図版7-3、12-2）

5号墳墓の南側に検出されたもので、調査時にはビットとしての取り扱いをした。しかし調査の結果墓塚と判明したので以下DD 50墓塚として記述する。



1. 地山を主体とした黄褐色土
2. 地山のブロック
3. 黄褐色土と地山の混合土
4. 黄褐色土のブロック
5. 暗褐色土、地山を小ブロック状に含む
6. 黄褐色土、地山を小ブロック状に含む
7. 暗褐色土、非常にベタつく

第15図 DD50墓塚平面図



第16図 DD50墓塚出土古銭拓影

本遺構は封土は削平されて消滅してしまい、墓塚だけが残ったものである。墓塚は長軸約160cm、短軸約120cm程の隅丸長方形のプランを呈し、深さは約70cmを測る。長軸方向は $N-11^{\circ}-$

Wではほぼ南北方向である。墓塚の埋土は暗褐色土と黄褐色の地山の混土層である。墓塚内からは永楽通宝2枚が出土した。

(2) 経塚 (第17・18・19図、写真図版8、12-3)

〔位置と現状〕2号墳墓の西約8m、3号墳墓と重複しており、本調査区ではCJ50、CJ53、DA50、DA53の各グリッドにかかわるものである。3号墳墓との新旧関係では経塚が古い。

経塚はマウンドを形成しており、墳頂付近に扁平な川原石が散発的に認められたが、当初経塚としての確認には至らず、マウンドとして調査に着手した。しかしその後墳丘のクリーニングの段階で多数の礫石がマウンドを覆って検出され経塚と確認した。

マウンド全体の形状は円形～隅丸方形のプランを呈し、規模は約8×8.5m、封土の高さは約80cmを測る。なおマウンドの南側は一部後世のカットングを受けて破壊されていた。

〔形態〕周溝を伴ない、マウンドを形成する。封土は黒褐色土と地山の混土層で形成され、特別の版築は認められない。礫石はこの墳頂を中心に約3×3.5mの範囲に亘る。礫石の厚さは墳頂で最も厚く20～25cmを測り、全体として墳丘は約80cm程の高さとなる。

〔周溝〕南側はカットングで破壊されているが、本来は全周していたと考えられる。周溝は隅丸方形で東西にやや長い。規模は東西約6m、南辺は不明であるが南北は約5.5m程と推定される。巾は60～80cm、深さは10～15cmを測り、断面は浅い皿状を呈する。

〔経石〕礫石は墳頂部が密で厚さ20～25cmを測り、礫石はかなりの数になる。経石はその礫石の中に含まれ、片面に一字が墨書されている。墨書された石は墳頂付近のしかも上部に集中する。外数の礫石の中から墨書の認められるものは135個で、文字の判読できるものは78個のみである。

〔その他〕土壌等その他の遺構は検出されず、遺物の出土もない。

(3) ビット類 (第20図、写真図版9・10図)

10個のビットを検出した。これ等のビットは形状、埋土の状況等からA～Cの三つにグループングした。

A：円形のプランを呈し、断面がピーカー状又はフラスコ状をしたしたビットで、この種のビットは3個検出された。

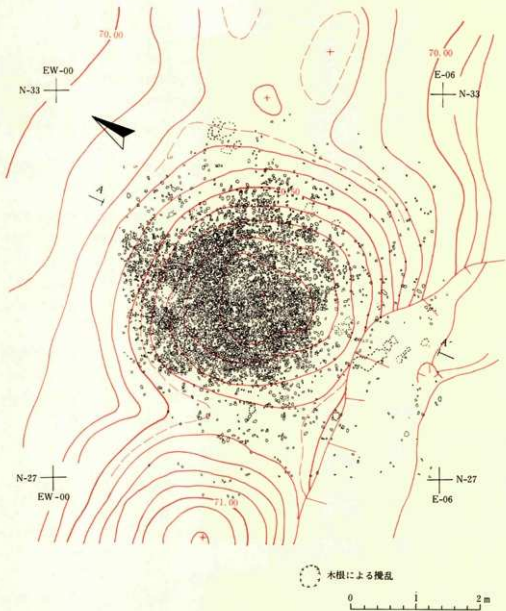
CH12ビット

口径110～115cmの円形のプランを呈し、底面は約84×88cmの隅丸方形のプランを示す。深さは約120cmを測る。底面は平坦で中央付近に径約11cm、深さ10cm程の小穴をもつ。

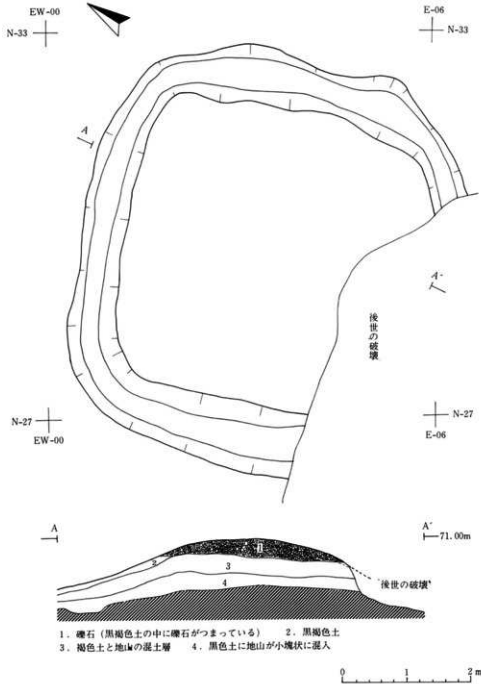
底部に比して開口部はやや開き、壁は開口部に向けて直線的に立ち上がる。埋土は基本的に3層に区分され、下部には壁面の崩落土がブロック状に混入する。上部は木根の複乱が目立つ。遺物の出土はない。

DB12ビット

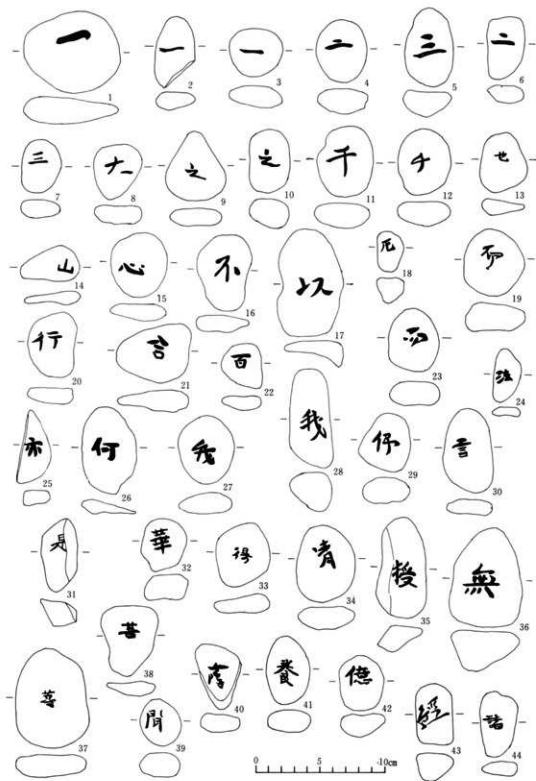
口径130～140cm、底径約80cmの円形のプランをもち深さは約104cmを測る。底面は平坦で中央付近に直径約17cm、深さ30cm程の小穴をもつ。



第17図 経塚検出平面図



第18図 経塚周溝平面図・経塚断面図



第19圖 經石実測図